

Antitled友の会

第2回研究大会

プログラム・予稿集

日時：2023年9月1日（金）09:15～17:45（08:45開場）
会場：立命館大学衣笠キャンパス & Zoom

プログラム

開場 08:45

開会の辞・趣旨説明 (09:15-09:20)

個人報告① (09:20-09:50)

異形と懸想——中世春日社周辺の性暴力——

辻 浩和

個人報告② (09:50-10:45)

相克する人間と妖怪——『ゲゲゲの鬼太郎』のリメイクを事例に——

坂本 茜

(Coffee break)

個人報告③ (11:05-12:00)

九条道家の生き残り戦略——撮家分立の一過程——

海上 貴彦

(Lunch)

個人報告④ (13:10-14:05)

“平和主義者”幣原喜重郎の誕生

——戦後における政治家のイメージ形成について——

杉谷 直哉

個人報告⑤ (13:10-14:05) ※会場2

遊廓の「内側」から社会をみる

——エゴドキュメントとしての和田芳子『続遊女物語』(1913年)——

山家 悠平

(移動時間：5分)

個人報告⑥ (14:10-15:30)

1960年前後東京における少年警察の非行防止活動

——「地域」の動員と少年非行の脱階級化および道德化・病理化を中心に——

渡邊 啓太

個人報告⑦ (14:10-15:30) ※会場2

鎌倉時代における賀茂別雷神社の社司と王権——神主を中心に——

若山 憲昭

(Coffee break)

個人報告⑧ (15:50-16:45)

系図研究試論——志布志野辺氏の系図を題材に——

温水 基輝

個人報告⑨ (16:45-17:40)

近代演劇と淀君——坪内逍遙の史劇を中心に——

嶋津 麻穂

閉会の辞 (17:40)

報告予稿集

個人報告①（報告20分・討論10分）

異形と懸想——中世春日社周辺の性暴力——

辻浩和（日本中世史）

網野善彦は論文「童形・鹿杖・門前」（『新版絵巻物による日本常民生活絵引』解説、平凡社、1984）において、中世の辻捕に着目し、一人旅をする女性の性が解放されていたと論じたが、そうした理解はジェンダー間の不均衡を無視したものとして多くの批判にさらされることとなった。そうした批判の中で、女性の安全を保証するルール、女性の旅の実態、辻捕事例とレイプとの関係などが指摘され、中世女性をめぐる実態が諸側面から明らかにされた（黒田日出男、保立道久、細川涼一、黒田弘子、野村育世など）。

さて、網野は女性の一人旅を論じた箇所の直前で中世の参籠が男女混交状態であったことを指摘し、春日社社司・氏人が社参の女人に対し密通したという福智院家文書の記事をもとに、寺社での性は開かれていたと述べている。この指摘は女性の一人旅や辻捕に関する論点と密接に関連しているが、これまで正面から議論されてこなかった。そこで本報告では改めてその理解の妥当性を検討し、当該事例の位置づけについて考察する。

まず、網野が典拠とした福智院家文書の事例は、鎌倉後期の寺社周辺で頻発していた「懸想」事案の一例と見るべきであり、時期的限定を外して一般化するべきではない。次に、「懸想」の主体は社司・氏人・神人であり、その対象には社参の女性だけではなく巫女なども含まれることから、これらは参籠の場の性質とは関係がなく、鎌倉後期に頻発していた「異形」の氏人・神人らによる問題行動の一環と見るべきであろう。そこにはアジールの性的解放性ではなく、「異形」による性暴力を読み取る必要がある。

これまで、「異形」は権力や差別との関係からのみ位置付けられてきた。しかし上のような「懸想」事案を通じて「異形」を考えると、そこには「異形」が抱える男性中心主義的な傾向が看取されるのであり、「異形」とされた人々の内実について再検討する必要があるように思われる。

参考文献

網野善彦「童形・鹿杖・門前—再刊『絵引』によせて」（『異形の王権』平凡社ライブラリー、1993）
松尾恒一「中世、春日社神人の芸能」（橋本政宣・山本信 編『神主と神人の社会史』思文閣出版、1998）

個人報告②（報告40分・討論15分）

相克する人間と妖怪 ——『ゲゲゲの鬼太郎』のリメイクを事例に——

坂本茜（マンガ研究、思想史）

本研究では、マンガ『ゲゲゲの鬼太郎』およびそれを原作としたテレビアニメとの比較を通じて、原作者水木しげるとアニメ制作陣との世代間における異界観の相違を検討する。1985年から1988年に放送されたテレビアニメ『ゲゲゲの鬼太郎』では、原作マンガと比較すると、その世界観に大幅な改変が認められる。具体的には、原作において人間の隣人として描かれていた妖怪が、アニメでは自然の象徴として人間と対立するようになった。また、原作者である水木しげるは、この改変に対して不満を表している。こうした水木の反応は、アニメ制作陣と彼との間に妖怪や異界に対する見方に齟齬があることを示唆している。

以上の観点を踏まえ、本研究では次の3点について検討を行う。第一に、水木しげるが妖怪をいかなる存在と捉えていたか、そしてその妖怪観はいかにして形成されてきたものであるかという点である。第二に、アニメが放送された1980年代の水木しげるが、どのような作品づくりを志向していたかという問題である。これについては、1988～89年刊行の水木作品『昭和史』を基幹史料として検討していく。最後に、テレビアニメシリーズの制作陣らが、妖怪を通じて何を描き出そうとしたかという問題について、彼らの経歴や当時の社会情勢、同時期発表のアニメ作品との比較等を通じ考察する。

参考文献

坂本茜「テレビアニメ『ゲゲゲの鬼太郎』第3シリーズにおける妖怪観の一考察——なぜ鬼太郎はリメイクされたのか——」（『マンガ研究』第29巻、57-73頁、2023年）
夏目房之介『マンガと「戦争」』（講談社、1997年）

個人報告③（報告40分・討論15分）

九条道家の生き残り戦略——摂家分立の一過程——

海上貴彦（日本中世史）

五摂家分立の過程において、九条道家は重要な位置を占める。道家は財産を主に子息の実経、孫の忠家の二人に配分し、前者の子孫が一条家、後者の子孫が九条家として存続した。また、次男の良実は道家から義絶されながらも後に摂関に再任し、二条家の祖となった。

道家の継承構想について、本来は単一の嫡子による代々の継承＝嫡々継承が志向されていた

た（が挫折した）のか、それともこの時期は（分割相続を前提とした）枝分かれの継承・展開が理想とされていたのか、意見が分かれている。これは「家」の継承という点で家族史的問題ではあるが、道家の摂関・財産継承は時々の政局に大きく左右されていたため、すぐれて政治史的な問題でもある。特に晩年の道家は寛元四年（1246）に失脚し、その数年後に処分状を作成して財産分配を行っており、政変が継承構想に与えた影響を考慮しなくてはならない。

そこで本報告では、特に寛元四年の政変から建長四年（1252）の道家死去までを中心に、政治史の動きと関連付けながら、道家の継承構想の変遷・転換を読み取っていく。その際、「いかにして摂関家の家格を維持して子孫に伝えるか」という「生き残り戦略」の側面を重視する。また、平安末期～鎌倉初期の摂家分立における女院の役割もふまえ、諸摂家の成立・分立の在り方の変化も考察する。それにより、九条道家の権力継承、九条家・一条家の分立という歴史的事象を、政治史と家族史の両面から位置づけることを試みる。

参考文献

西谷正浩『日本中世の所有構造』（塙書房、2006年）第三編の諸論考

海上貴彦「五摂家分立をめぐる一考察—摂関継承の転換について—」（『鎌倉遺文研究』46、2020年）

個人報告④（報告40分・討論15分）

“平和主義者” 幣原喜重郎の誕生 ——戦後における政治家のイメージ形成について——

杉谷直哉（日本近現代史）

戦前に外務大臣を務め、戦後に内閣総理大臣を務めた幣原喜重郎は、戦前に行った協約外交である幣原外交を根拠に、しばしば「平和主義者」として評価されてきた。そしてそうした「平和主義」的な思想が日本国憲法第九条の源流となったとする見解が幣原発案説として少なからず支持されている。しかし、今日の外交史研究によって、幣原の外交は「平和主義」的な外交思想に基づくものなどではなく、リアリズムに基づいた伝統的な外務省路線を継承するものだったとされている。本報告は、幣原がどのようにして「平和主義者」と見なされるようになったか、そのイメージ形成の過程をたどる。幣原外交に「平和主義」思想があったと見なした最初期の著作は幣原平和財団編『幣原喜重郎』（幣原平和財団、1955年）である。幣原平和財団は1952年に設立された団体で幣原を「顕彰」する目的があった。ここから幣原外交が「平和主義」外交であったとする前提が広まっていくこととなる。報告の中では当初は幣原を「顕彰」する意味合いで論じられた「平和主義者」としてのイメージ形成が、政治家や憲法学者、歴史学者によって「学説」として位置づけられていく過程を明らかにする。そのために雑誌記事や憲法に関する社説、関係者の回想録、研究者の幣原に関する論文、そして現在に至るまで幣原発案説を広めている新聞記事などを、イメージ形成を補強してきた史料として扱う。そして、それらの主張が幣原外交に関する正確な評価を欠いていることを指摘する。その上で政治家のイメージ形成が今日の政治的論点である憲法改正にまで影響を及ぼしていることを示し、政治家の実際の評価とイメージに基づく評価を分けて考えることの必要性を説く。

参考文献

幣原平和財団編『幣原喜重郎』（幣原平和財団、1955年）

杉谷直哉「政党政治家のイメージ形成について」（『山陰研究』第12号、2019年）

個人報告⑤（報告40分・討論15分）

遊廓の「内側」から社会をみる

——エゴドキュメントとしての和田芳子『続遊女物語』（1913年）——

山家悠平（日本近代女性史）

明治天皇の諒闇であった1913年1月、内藤新宿遊廓で働く和田芳子という娼妓による『遊女物語 苦海四年の実験告白』（文明堂）が発行された。発売直後から大きな話題を呼び、『京都日の出新聞』を皮切りに、以降、全国の三十紙以上の書評欄で取り上げられ、4月末には続巻である『続遊女物語』が発行されるほどの人気を博した。それだけでなく、『遊女物語』の成功は娼妓名義の出版ブームまで巻き起こし、同年7月までに確認できるだけで5冊の類書が発行されている。

本発表では、これまでまったくといっていいほど注目されてこなかった和田の2冊目の著書である『続遊女物語』に注目する。『続遊女物語』は、『遊女物語』への反響を書いた「遊女物語を出して後」、遊廓での日々の生活を綴った「楼内生活」、日々の雑感「苦界雑感」、客から届いた手紙集「花香鳥話」、1912年5月1日から6月5日までの「花魁日記」という5部構成になっている。なかでも印象的なのは、登楼した客の『遊女物語』への様々な反応を書き留め、ときには辛辣な筆致で批評しているところである。たとえば、雑誌『うきよ』の記者には、最後まで著者の妹であると嘘をつきとおし、後にその記事が掲載された『うきよ』（「落籍されたる遊女物語の著者▲大萬楼へ登楼しその妹女郎と語る」1913年3月号）を読んで「こんなヘナチョコ記者でも相当の月給をもらっておるのかしら」という感想を書き付けている。そこでは常日頃一方的に見られ評価される遊廓という空間で生きる女性が、逆に客や社会に視線をむけ、言葉を投げ返しているのである。

『続遊女物語』というアクチュアルな記録に、遊廓という空間の内側から和田が社会をどのようにとらえていたのかをさぐりたい。

参考文献

Ann Marie L. Davis "The Unprecedented Views of Wada Yoshiko: Reconfiguring Pleasure Work in Yujo monogatari(1913) — 和田芳子の破天荒の視点：『遊女物語』の売春" U.S.-Japan Women's Journal No. 46, 2014.

長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020年

個人報告⑥（報告60分・討論20分）

1960年前後東京における少年警察の非行防止活動

——「地域」の動員と少年非行の脱階級化および道德化・病理化を中心に——

渡邊啓太（日本現代史）

戦後日本における少年警察の形成、確立および展開に関する先行研究においては、内務省警保局や国家地方警察本部、警察庁の通達並びに関連する諸々の法制度の変遷等、中央政府の動向を対象とした通史的な分析が主として行なわれてきた。こうした議論の中で、高度成長期前期の少年警察の性格は、補導や少年非行の防止に関し「地域」との連携を重視する「地域化」と、少年非行の「科学的」分析の本格化という「科学化」として特徴づけられる傾向にある。

以上の動向を念頭に置きつつ、本報告では、警視庁防犯部少年課の部内資料『青少年』等の資料の分析を通じて、この時期の東京における少年警察の非行防止活動の実態を明らかにすることを試みる。東京都において1955年より活発化する補導を中心とした非行防止活動を分析し、中央政府の動向を辿るだけでは把握しきれない「地域」における少年警察の具体的な戦略とローカルな権力行使の諸相を明らかにすることによって、この時期の少年警察を象徴するとされる「地域化」と「科学化」に関する議論を深化させることができると考える。

一方、少年非行の原因に関する言説を対象とした研究では、この時期は少年非行の原因として貧困等様々な社会状況が論じられていたため、「家庭」もあくまでその中の一つとして問題化されていたにすぎない、もっといえば「欠損家庭」「貧困家庭」等一部の「特殊」な「家庭」が主として問題化されていたにすぎないという指摘がなされている。対して本報告では、この時期の少年警察の言説を対象として、上記の整理に必ずしもあてはまらないような仕方で少年警察が「家庭」や「地域」を少年非行と関連づけて問題化し関与を試みていることに着目した分析を行なう。この作業を通して、「家庭」や「地域」と少年非行との関係を貧困から切り離し、「家庭」での養育態度や対象・環境の病理性等々の問題に再接続するというような仕方で少年警察が遂行する少年非行の脱階級化および道徳化・病理化の諸相を明らかにしたい。

参考文献

辻脇葉子「戦後少年警察の軌跡に関する一考察（2）」『明治大学短期大学紀要』43号（1988）

武内謙治「少年司法の理念と構造——少年への援助と少年犯罪の社会構造的性」九州大学博士論文（2000）

個人報告⑦（報告60分・討論20分）

鎌倉時代における賀茂別雷神社の社司と王権 ——神主を中心に——

若山憲昭（中世宗教史）

賀茂別雷神社（以下、「賀茂社」という）は山城国一宮であり、また、二十二社の第三位の神社として、伊勢神宮、石清水八幡宮に次ぐ地位にあった。

黒田俊雄が権門体制論、顕密体制論、寺社勢力論を提唱して以降、中世宗教史を巡る研究環境は大きく変化し、天台、真言、南都などの寺院を中心に多くの研究成果が積み重ねられてきた。一方で、黒田の寺社勢力論において神社の扱いが不十分なことなども影響し、中世の神社の研究は低調であり、賀茂社も例外ではない。中世の賀茂社については従来、賀茂県主を称する同族集団である氏人に注目が集まってきた。氏人は十三世紀中期には氏人惣中を形成し、中近世を通して賀茂社の神事に奉仕し、賀茂境内六郷の支配に当たっていたことが明らかにされてきた。

本報告で取り扱うのが、氏人の中から選任された社司である。社司は全国の賀茂社の庄園を分割して支配する荘園領主として一種の支配集団を形成し、その頂点に立った神主が賀茂社を統括していた。中世の賀茂社の神事、所領支配を中心的に行っていたのは社司であるが、先行研究は概説や言及にとどまり、本格的に分析されていない。賀茂社の運営の中心にいたのは社司であり、中世の賀茂社の実態を明らかにするうえで社司組織の実態解明を行うことは不可欠である。

また、社司は朝廷から口宣案で補任され、御師としても活動し、家芸の蹴鞠でも院に奉仕するなど、王権と関係を有していたことは断片的に述べられてきたが、両者の関係が社司組織にどのような影響を与えたかは不明なままである。

近年、鎌倉時代後期の神主が記した年代記や日記などを含む『賀茂神主経久記』の翻刻が開始されるなど、鎌倉時代は前後の時代に比して比較的、史料に恵まれており、研究環境も整いつつある。

以上を踏まえ、本報告では鎌倉時代の賀茂社の社司組織について、王権と社司、特に神主との関係を踏まえつつ、その変遷と実態を明らかにしたい。

参考文献

大山喬平「中世の賀茂六郷一系図と戸籍のある中世社会」『ゆるやかなカースト社会・中世日本』校倉書房、2003年
須磨千頼「中世における賀茂別雷神社の往来田」『賀茂文化』第13号、2017年

個人報告⑧（報告40分・討論15分）

系図研究試論 ——志布志野辺氏の系図を題材に——

温水基輝（日本中世史）

本報告の目的は二つある。

一点目は、江戸末期に成立したとされる志布志野辺氏の系図の信憑性を検討することである。

まず、志布志野辺氏の概要を記述する。野辺一族は、南北朝期から室町中期頃、日向国櫛間院（宮崎県串間市）を中心に周辺を支配した一族である。しかし、十五世紀中頃、野辺一族はその勢力を急激に落とし、支配維持が困難になった。その後、野辺氏は二流に分かれ、最終的に都城（宮崎県都城市）と志布志（鹿児島県志布志市）に行き着いた。その地名を冠し、それぞれ都城野辺氏・志布志野辺氏と呼ばれる。

本報告で検討する志布志野辺氏の系図は江戸末期の成立と考えられる史料であり、中世南九州の研究でも活用される系図である。しかし、十分な史料批判をされたとはいいがたい。幸い、野辺一族関係系図は両野辺氏などに数多伝来しており、相互に比較検討が可能である。そこで、前半部では当該系図と、より成立年代が早い諸系図とを比較し、当該系図の信憑性を検討する。

二点目は、系図研究の体系化に資することである。

系図は、研究の中心になることが稀で、主に補助史料として扱われることが多い。これは「系図は信頼度の低い史料」という認識がアカデミックの世界にあるからだろう。また、系図を積極的に活用されたとしても、各系図を個別に検討する研究が主である。個々の家系への興味が根底あるためと考えられる。このように、系図は「信憑性」と「個別検討」という課題があり、学問として体系化されてはいない。そこで、後半部では系図の具体的な分析方法を提示し、系図研究の体系化に資したい。

以上のように、本報告は志布志野辺氏の系図を題材に、前半部で「信憑性」という観点から史料を検討する。そして、後半部では前半部で得られた結果をもとに、当該系図から読み取れる「意図」を探ると共に具体的な分析方法を試みるものである。

参考文献

温水基輝「猪俣党野辺氏の「西遷」と野辺政範」（『紀要』15、埼玉県立歴史と民俗の博物館、2022）
青山幹哉「史料学としての系図学入門」（『アルケイアー記録・情報・歴史』7、南山大学史料室、2013）

近代演劇と淀君 ——坪内逍遙の史劇を中心に——

嶋津麻穂（近代史・メディア史）

淀君は、文学や歌舞伎、絵画や映像作品など、戦国時代を舞台とした創作に欠かせない女性である。淀君像に関する先行研究では、江戸時代までの悪女像とは異なる、「烈婦列女」の淀君が坪内逍遙の戯曲で描かれ、歌舞伎で上演されることで一時的に流布したことが明らかにされた。本発表は、先行研究を踏まえつつ、逍遙の史劇とその淀君像を再考するものである。逍遙の戯曲にはシェークスピアからの影響が指摘されるが、西洋的な文化をも包括した日本独自の演劇を志向するなかで創造された史劇の登場人物は、シェークスピア以外にもさまざまな在来の文芸に由来していた。

本発表では、逍遙の戯曲を在来の文芸や歌舞伎作品と比較しながら再考し、淀君を中心とした登場人物の分析を通して彼の芸術理念を逆照射することを試みたい。具体的な発表内容は次のとおりである。まず、時代状況を確認し、江戸時代の歌舞伎作品との比較を通じて、『桐一葉』（1894）と『沓手鳥孤城落月』（1897）における新しさと連続性を明らかにする。江戸文芸の影響を引き継いだ逍遙の史劇は、英雄を排除してありのままの人びとと社会を描く、新しい視点を盛り込んだもので、その試みは歴史学の動向とも近似していた。また逍遙が滑稽にも見える大坂の陣を「悲劇」として描いた背景には、徳川幕府の終焉があった。こうした試みのなかで、逍遙は実録や江戸文芸を参考にしながら複雑な性格の淀君を描き、高く評価された。逍遙は史論としての史劇を執筆し、そこに登場する淀君を生々しく描写することに成功したのである。

参考文献

福田千鶴『淀殿 われ太閤の妻となりて』ミネルヴァ書房、2007
堀新、井上泰至編『秀吉の虚像と実像』笠間書院、2016